Osaka University Knowledge Archive

Title	ソクラテス者がやってきた、Ja, Ja, Ja !
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 22-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7882
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集 2

ソクラテス者がやってきた、Ja, Ja, Ja！

ＳＤ週間 in大阪

ＳＤ（ソクラティク・ダイアローグ）についてはすでにこの『臨床哲学のメチエ』で特集し、紹介しているが、ドイツで考案された哲学的グループ対話の方法論であり、教育・医療・企業倫理など広い分野で実践・活用されている。

臨床哲学研究室では、関連する哲学プラクティス（カウンセリングなど）の運動をも含めて1998年から関心を持ち、国際学会に参加するなどして欧米の研究者・実践者たちと意見交換してきた。その中でドイツを中心とする「ソクラティク哲学協会」との交流が深まり、2001年９月５日から９日にかけて、協会を代表する形でＳＤ公認ファシリテーターのホルスト・グロンケ（ベルリン自由大学）とベアーテ・リティヒ（ウィーン高等研究所）の２人を大阪に招き、公開の講演会やコロキウム、ＳＤ（およびディレンマ・トレーニング）を開催することができた。日程は次のようなものであった。

９月５日（水）　ホルスト・グロンケ氏講演
「ネオソクラティク・ダイアローグの理論と実践」（ドイツ語）
９月６日（木）　臨床哲学コロキウム「現代社会と実践哲学」
提題者：ベアーテ・リティヒ（ウィーン高等研究所）、霜田求（大阪大学・医学部）、稲葉和人（京都大学）、山中浩司（大阪大学・人間科学部）
９月８／９日（土日）　ソクラティク・ダイアローグ、デイレンマ・トレーニング

以下はこの「ＳＤ週間」の催しのうち、ＳＤとディレンマ・トレーニングの模様についての簡単な報告である。なお、講演会とコロキウムの報告は『臨床哲学』第４号（2002年）に掲載される予定である。

ＳＤとディレンマ・トレーニングは英語で行われた。日本ではあまり耳にしたことのない英語による実践で、当初は危惧がないでもなかったが、それでもおおむね支障なく進行したことについて、グロンケとリティヒの両氏、そして参加者各位の意欲と能力に敬意と感謝を表したい。

論拠づけ（argumentation）を指向するＳＤ

堀江　剛

９月８日、大阪大学待兼山会館において、ドイツからやってきたＳＤ理論家、ホルスト・グロンケ氏のファシリテートで一日だけのＳＤが行なわれた。テーマは "How to deal with feelings?"、参加者は臨床哲学研究室の学部卒業生、院生、大学院卒業生、留学生、大学教員、看護学教員など七名の多様な顔ぶれであった。筆者はオブザーバーとして参加した。対話の内容については参加者のプライバシーに関わることも多いので、ここでは触れず、グロンケ氏のＳＤの進め方を中心に筆者の気づいたことを述べることにする。

まず参加者が例を出し合う場面で、おもしろい工夫がなされた。参加者を二人（ないし三人）の小グループに分け、例の「話し手」と「聴き手」（および「観察者」）の役割を持たせ、交互に出し合った例の一つを選んでグループ全体に示し、それをまた一つに絞るという作業をした。これは、一日ＳＤで時間が限られているため、通常なら一人一人から例を出し合い一つに絞る時間を節約するための方策である。また、話し手／聴き手という役割分担は、患者／医者関係のモデルに相当し、そこで「問題を話す」「問題を聴く」ことの難しさを体験する意味もある、と説明があった。

また例が一つに絞られ、その例を記述す